

千葉県無形民俗文化財指定50周年記念

白^{しら}粉^{こな}屋^やおどり

芸能大会

平成30年
11月24日(土)

開場 12時30分

開演 13時(終演予定16時30分)

芝山文化センター



白粉屋おどり

開催にあたって

白柘粉屋おどりは、昭和四十三年四月九日に千葉県無形民俗文化財の指定を受け、白柘粉屋おどり保存会によって演じられてきました。本年、県指定五十周年を迎えたのを記念して、「白柘粉屋」にゆかりのある団体を招いて芸能大会を開催する運びとなりました。この機会に多くの方々にご覧いただき、今後の保存・継承に関心をもっていただければ幸いです。

平成三十年十一月二十四日

白柘粉屋おどり保存会 会長 吉河 一男
芝山町教育委員会 教育長 内田 誠



プログラム

開 会

主催者挨拶

芝山町長挨拶

来賓挨拶

公益財団法人三菱UFJ信託地域文化財団助成贈呈式

基調講演

「旅する粉屋をどり」藤本秀康氏（葛西おしゃらく保存会会長）

公 演

白柘粉屋おどり（千葉県指定無形民俗文化財）

森邑おいとこ踊り（宮城県登米市指定無形民俗文化財）

奥州森邑おいとこ踊り

菊名の飴屋踊り（神奈川県指定無形民俗文化財）

「白松粉屋」

「子守」

葛西のおしゃらく（東京都指定無形民俗文化財）

「よかよか飴屋踊り」

「木更津」

「白柘粉屋」

白柘粉屋おどり—小学生との共演—

閉 会



白柵粉屋おどりの発祥と伝播

白柵粉屋の由来

江戸時代の白柵村（現芝山町大里）にあった粉屋の美しくも薄命だった娘を慕い、その婿になりたいと唄い踊るのが白柵粉屋おどりで。踊り手は女で男役と女役に分かれ、演奏は、太鼓・四つ竹・笛で行われます。「おいとこそうだよ」で始まる唄い出しにより「おいとこ節」とも呼ばれ、天保年間（一八三〇～一八四三）に江戸で流行し、明治・大正では芸事の習い始めに用いられたといわれています。

また、岩手県や宮城県では「おいとこ節」が地元の代表的な民謡として唄われ、東京都・埼玉県・神奈川県では「白柵粉屋」が、万作踊り・おしゃらく踊り・飴屋踊りなどといわれる郷土芸能の演目のひとつとして登場します。白柵粉屋の物語は、歌詞や踊りはその地域独特なものに形を変えながらも各地に広まっていったのです。

『山室譜伝記』と白柵粉屋

白柵粉屋のことが記された最も古い文献が『山室譜伝記』です。『譜伝記』によると、天正十八年（一五九〇）の飯櫃落城により討死した武将があり、残された母と娘が衣類や道具を売りながら生計を立てようとしていますが、ついに石臼だけが残ったので粉屋を始めました。すると、次第に慣れないながら働く母子の姿に同情が集まり繁盛していったと記されています。娘は、「器量諸人に優れ」、「白柵の粉屋の婿に成たや、粉箱かついで粉を売るとも」と唄われたといえます。白柵には石臼や什器が伝来していた「粉屋」の家、さらに、文化九年（一八一二）に十九才で亡くなった久子の「容顔院妙歌日詠」という戒名を刻んだお墓もあります。『譜伝記』の記述とは、年代など必ずしも一致しないところもありますが、白柵粉屋と美人な娘が存在したことは間違いないでしょう。

壇林と多古街道

多古町に中村壇林（日本寺）、匝瑳市に飯高壇林（飯高寺）という日蓮宗の僧侶を養成する学問所がありました。それぞれ数百名の学僧が全国各地から集まり学んでいたといわれています。その日本寺から江戸へ向かう学僧のために、目印として一里ごとに一里塚（多古町染井）、二里塚（白柵）、三里塚（成田市）、法華塚（成田市、四は死に通じることから言い替えています）が築かれました。この道は、酒々井で成田街道に合流して江戸へ至る多古街道とも一部重なります。多古街道は、多古藩主松平氏が参勤交代で往復しましたし、銚子方面の生ものが運ばれる道でもあり、多くの人々の往来がありました。

したがって、壇林へ学びに行く学僧が、途中の白柵粉屋の娘を見初めて、その想いが唄になったということは十分に考えられることでしょう。そして、この街道を行き来した学僧や他の人々によって各地に白柵粉屋の物語が広まっていったのかもしれない。

白柵粉屋おどりは、昭和四十三年に千葉県無形民俗文化財に指定され、地元の白柵粉屋おどり保存会により継承されています。現在は、芝山にはわ祭や芝山町文化協会主催の芸能発表会などで演じられるほか、「白柵粉屋」を演目にしていてる各地の郷土芸能団体との交流にも努めています。



「容顔院妙歌日詠」と刻まれた墓



白柵粉屋おどり保存会の活動

昭和二十年代には「みどり会」と称して唄と踊りを披露していました。昭和四十三年に千葉県指定となった後には、白柵粉屋おどり保存会と称して、「おいとこ節」の盛んな岩手県千厩町（現一関市）や宮城県迫町（現登米市）、「白柵粉屋」を演目に行っている郷土芸能団体との交流、日本寺（多古町）の檀林文化祭への出演、地元では白柵区でのおいとこまつり、はにわ祭や芸能発表会に出演をしてみました。

そうした活動の中で、平成二十三年六月には、全日本民謡指導者講習会（静岡県熱海市）に出演し、『ふる里の民謡第五十一集』（日本コロムビア）のDVD・CDに収録されました。同年十一月には、千葉県教育功労者表彰を受賞しました。

また、地元の小学校の運動会や芝山町民体育祭で、児童により白柵粉屋おどりが披露され、保存会ではその指導を行う活動を継続しています。



保存会の前身「みどり会」の頃（昭和21年）



全日本民謡指導者講習会（平成23年、熱海市）

♪ 白柵粉屋おどり
「白柵粉屋」

おいとこそうだよ 香取 印旛、山武の郡で
音に聞えし 白柵村にて 木内の本家は
粉屋で御座る 一代二代の 粉屋ぢや御座らぬ
先祖の代から十代伝わる粉屋の仁工門
そのや内には一人の娘が むこ取り娘で
年は十六 おさよ と言うてな きりよの良いこと
卵に目鼻をつけたる様だよ 成程良い娘だ
あの娘と添うなら 三度に一度は、人の目忍んで
朝は早起き 水もくみましょ おまんまも炊きましょ
備前の播ばちで さんしょうの摺こぎで ころりころりと
お味噌も すりましょ手鍋も下げましょ 内の家風も
知らなきやならない御作法も知らなきや むこにはなれない
そのや あいまに粉もひきましょ おさよと二人で
石うす まわせば よい粉できます よい粉できたなら
白木の粉箱にうんとこさつめてな、明日は粉売りと
仕度をなされて きやはんに甲掛け 四ツぢのわらぢを
しつかと はいてな 東は飯岡と銚子の端まで
西は東海道の五十と三次 粉箱かついで
粉よし粉よしと売らざばなるまい おいとこそうだよ



藤本秀康氏

葛西おしゃらく保存会会長

昭和三十四年、邦楽演奏家を志し、民謡歌手初代鈴木正夫氏の紹介で、初代・藤本琇丈師の内弟子となる。昭和四十三年、東京都江戸川区葛西と千葉県浦安市の郷土芸能「おしゃらく」の保存会を結成し、伝承育成に努める。NHKテレビの「芸能百選」「邦楽百選」「それゆけ民謡」などに出演。平成二十六年、「おしゃらく」の成り立ちや演目に関わる現地調査の成果などをまとめた著書『おしゃらく』（株式会社イー・プレス）を出版。



葛西のおしゃらく

東京都指定無形民俗文化財・江戸川区登録無形民俗文化財

東京都と千葉県の境を流れる江戸川（旧利根川）下流域に伝承する「おしゃらく」は、江戸時代の幕末に近い安政から万延年間に創られた踊り念仏が起源で、江戸を中心に広く関東、東北地方に広まりました。おしゃらくの語源は、「お洒落」の意味で、衣装は「胴抜き」という広口仕立ての、



色彩豊かな長襦袢に、しごきを締め、裾を高く端折り、片袖を脱いで踊られます。おしゃらく節は、「上げ」「唄」「切り」から成り、念仏唄の特徴を持ち、江戸の風俗を色濃く残す庶民芸能です。演目は、そうだい節として「高砂」、「木更津」、そのほかに「新川地引き」、「白柵粉屋」、「子守り」などの演目があります。

♪ 葛西のおしゃらく

「白柵粉屋」

略

サーチヨイト そうだよ 今出て 踊る娘はあれが 白柵粉屋の娘か
なる程よい娘だ
あの娘と添うなら 水も釣りましよ 手に鍋提げよが 三度に 一度は
人の目も 忍んで おまんまも 炊きましよナ キタ むーこーにイ
イヤレーナー なアヨオホホイ なーなーアリーターやハハ キ
タヨホホ ホイ
サーチヨイト 婿だよ 婿となるには アノーソレ 粉屋は 一代二代
の 粉屋じゃござらぬ 十代伝わる 粉屋であればな お家の ご作法
は 肩が弱しと 泣き泣き ながらも 粉の箱 担いたら 西や東を
ぐるりと回りに 売らばなるまいナ キタ
粉ばーこーオー このーヨオホホイ サアヨーホ ヨホオー オーホイ
かアアズウーイイイーエエ おいイーエエー おいーた
ハハ キタ ヨホホホイ
サーチヨイト 早いが 粉の箱 担いたら 東海道はナ 五十と三次
広しといえども 中にも 取り分け 小夜の中山 夜泣き 石のナ そ
のや あたりに 十六、七なる姐さん達がナ 小松の 木陰で 飴で餅
せるよに せらずば なるまいナ キタ 粉屋はこうやれ引くとも

略



菊名の館屋踊り

神奈川県指定無形民俗文化財

江戸時代に村々を回っていた飴売りの行商人が客寄せのために歌舞を演じたのが始まりとされ、三浦半島を中心に伝わっています。手踊り系の「白松粉屋」、「新川」や段物系（台詞の入った芝居もの）の「笠松峠」などの演目があります。三浦市の菊名地区では、毎年十月二十三日に白山神社の例祭で、境内に舞台や楽屋が作られ、館屋踊りが奉納されます。一時期中断をしていましたが、近年は地元的女性たちが中心となって復活し、保存会の指導のもと継承に努めています。



♪ 菊名の館屋踊り

「白松粉屋」

サアー ちよいとちげねな 向こうな茶屋からちよいと出て踊るのは、あれがまた白松の粉屋の娘か、なるほど良い娘だ。あの娘と添うには朝も早起きお水も汲んだり、手鍋も下げたり三度に一度は人の目も忍んで「おまんま」も炊きましようとなんやれ。ソーソーソーソーアアアソーソーソーアアア

サアー ちよいとむこうだよ あいや又 粉屋の婿となるには愚かじゃならぬ。あのや又粉屋は一代や二代の粉屋じゃござらぬ。親の代から先祖の代から孫、曾孫玄孫や、ひつくるけて、きしやごの代からちやうど私で十代伝わる粉屋であればな、お家のご商売 肩が痛しと足が弱しと泣き泣きながら粉の箱かついだら、西は七浦、東は九十九里、たいどのはなからようかのうらまでくるりと回して粉良しとな売らずばなるまいぞなんやれ

略

森邑おいとこ踊

宮城県登米市指定無形民俗文化財

奥州森邑おいとこ踊り

おいとこ節は、宮城県や岩手県を代表する民謡として広く唄われてい
ます。商売繁盛で何代も栄える家という意味から宴席にふさわしく、祝
儀曲として広まりました。関東地方の念仏踊りが伝わった、また、天保
年間の印旛沼干拓に従事した東北地方出身の人々によって伝えられたと
もいわれています。踊りは手踊りで、登米市迫町森地区では、おいとこ
踊りでまちづくりを進めていて、毎年十一月に「伊達なおいとこ踊り宮
城大会」を開催し、継承に努めています。

♪「おいとこ節」

おいとこそうだよ 紺の暖簾に 伊勢屋と書いてだんよ
お梅十六 十代伝わる粉屋の娘だんよ
あの娘はよい娘だ あの娘と添うなら 三年が三月でも
裸で茨も背負いましよ 水も汲みましよ 手鍋も提げましよ
なるたけ朝は早起き 上る東海道は 五十と三次
粉箱ヤツコラサと 担いで歩かにはなるまい おいとこそうだんよ
それさままた続きます 踊る人よければ いま一つ頼みます
おいとこそうだよ 西根のはてから 小雪がさらさら 飛んでくる
土手で鳴くのは こおろぎ 機織り きりぎりす 管を巻く
お山で鳴くのは 紅葉のその下で 妻を呼ぶ声 鹿の声
軒端でチャボが そりや鳴く サアサアおいらも 帰らなきやなるまい
おいとこそうだんよ





①第8回夫婦石おいとこ大会（平成14年、岩手県千厩町） ②白樹おいとこまつり ③白樹公民館での練習風景
④日本寺の檀林文化祭（多古町）

芝山町教育委員会
 〒289-1624
 千葉県山武郡芝山町小池973
 TEL 0479-77-1861
 FAX 0479-77-1950
 e-mail syakyo@town.shibayama.lg.jp